



Global Collaboration Center, Osaka University

[センターについて](#)[スタッフ](#)[教育活動](#)[研究活動](#)[実践支援](#)[出版・公開](#)[アクセス](#)
[HOME](#) > [教育活動](#) > [FIELD](#) > [海外インターンシップ](#) > [派遣リスト](#) > [UNICEF（日本）](#)

海外体験型教育企画オフィス（FIELD）

海外インターンシップ報告

研修先：UNICEF（日本）

研修期間：2013年8月26日～9月27日

報告者：佐々木周作（国際公共政策研究科比較公共政策専攻M2）

*日本国内におけるインターンシップはGLOCOL海外インターンシップ助成の対象とはなっていませんが、国内で国際的活動を行っている機関でのインターンシップはGLOCOL科目「海外インターンシップⅡ」の単位認定対象としています。

1) 準備編

応募の経緯：

2013年3月、超域イノベーション博士課程プログラムの「海外プレ・インターンシップ」の一環で、パリのUNESCOやOECDの職員の方を訪問したことが契機となっている。大学院では、経済学の立場から個人の寄付行動について研究しており、将来は研究者の立場から、非営利組織の資金調達活動の改善に貢献したいという意向を持っていたため、国際機関におけるキャリアや、それを目指したインターンシップについて強く意識したことは無かった。しかし、縁あって職員の方と直接お話する機会を得たことで、多くの国際機関の活動が政府からの分担金・任意拠出金、あるいは民間からの寄付金に依存していること、またその中でも、個人の寄付者から活動についてどのように理解を得て支援してもらうかが重要な課題であることを知った。そして、数ある国際機関の中でも、UNICEFは政府からの任意拠出金や個人からの寄付金の調達力に優れていることを知り、結果として研究者の立場に就くことになったとしても、UNICEFでインターンシップをする経験は、非営利組織の資金調達活動の改善に貢献するという自身の目標の達成に活かせるかもしれないと考えるようになった。

選考準備：

2013年度は博士前期課程の2年目であり、修士論文の執筆に優先して時間を割く予定ていたため、滞在期間が長期になる海外でのインターンシップは選択肢に入れていなかった。ちょうどその頃に、敦賀准教授からUNICEFに東京事務所があることについて教えて頂いたことから、夏期休暇時にUNICEF東京事務所でインターンシップを行うことを目標とし、選考に向けて準備を行うことにした。

まず、UNICEF東京事務所のホームページに、資金調達・アドボカシー部門のインターンシップ募集について掲示があったことから、その内容を踏まえて英文のカバー・レターと履歴書を作成した。作成した後、敦賀准教授に添削をお願いし、最終版をUNICEF東京事務所宛に送付した。結果として選考が進み、後日、スカイプにおいて面接して頂けることになった。

面接までの期間、自分がなぜUNICEF東京事務所においてインターンシップをしたいか、について整理することに注力した。日本には、UNICEF東京事務所と共に日本ユニセフ協会が存在し、前者が国際機関UNICEFの一部門として、日本・韓国政府からの資金調達を担当する一方で、後者は日本の公益財団法人として、民間企業や個人からの資金調達

を担当している。研究の直接的な興味関心は後者の活動に近いが、今回のインターンシップでは、国際機関が、全体の資金調達活動の中で個人の寄付金についてどのように位置づけているかについて俯瞰的に捉えたかったため、前者でのインターンシップを希望した。

スカイプを通じた面接は、およそ1時間に渡った。此方は自宅から通信し、念のためスーツを着用した。面接は前半と後半に分けられ、前半は日本語で、実際の業務内容と私の研究関心が一致しているかについての確認が行われた。後半は英語で、私が提出した履歴書を下に、「前職のチーム・マネジメントについて苦労した点、その困難に対して工夫した点」などについて質問された（私は4年間ほど、日本の金融機関で勤務した経験があったため）。面接の雰囲気は終始和やかで、回答する際には時に笑いも含ませながら行うことができた。他にも面接候補者がおられるとのことだったが、結果として、運良く採用されることが決まった。

採用後準備：

インターンシップの期間は1ヶ月間で、短期ではあるが東京で居住場所を確保する必要があった。東京の家賃相場は大阪と比べて高く、かつ短期利用になると月額12-3万円を超えることの方が一般的である。極力安価に抑えたかったが、滞在期間中インターンシップと併行して修士論文の研究も進める必要があり、集中して作業するための個室は最低限確保しなければならなかった。結果として、自炊器具や洗濯機などの設備がある阿佐ヶ谷のシェアハウスに居住することを決めた。月額にして8万円弱ほどだったと記憶している。

2) 実習編

インターンシップ業務：

UNICEF東京事務所は、各開発途上国の事情やニーズと照らし合わせながら、日本政府・韓国政府から現地におけるUNICEFの活動に必要な予算を確保することを業務としている。インターンシップの業務内容は、その資金調達活動の補助と共に、アドボカシー活動の補助であった。前者は、各国の事務所から提出される予算申請のプロポーザルが、外務省のODAの動向・方針、及びUNICEF東京事務所の考える優先分野の方針と合致しているかの確認、あるいは、各国の事務所から提出される前年の活動報告書の内容が、予算申請時のプロポーザルと合致しているかの確認などである。後者は、日本政府の予算が各国で効果的に使用されたことを報告するための広報資料の作成などである。

前者については、上記に加えて、インターンシップに着任した8月26日直前に、シリア内戦が深刻化する事態が発生したことを踏まえて、新たにUNICEFが支援すべき事象がないかどうかについて現地新聞などをもとに調査した。また、後者については、東京事務所にボランティアとして勤務されていたインフォグラフィックデザイナーの方と協力して、外務省など関係者に配布することを目的に、各国におけるUNICEFの活動を報じた現地新聞などの情報をもとに冊子を作製した。

これらの業務は、常に上司とコミュニケーションを取りながら進めることを心がけた。インターンシップ実施時期が、職員の方が交代で休暇を取られる時期と重なっていたことから、複数の上司の方の下で業務を実施し、様々な点で意見交換ができ、そのことも良い経験となった。また、各国の状況について調査する業務においては、限られた情報源の中で調査する能力について高く評価して下さり、自分の強みとして改めて認識することができた。

ネットワーキング：

私が研究の関心からUNICEF東京事務所でのインターンシップを希望したことを考慮して、インターンシップ業務に支障がない範囲で、興味のある他機関や研究会・フォーラムに出席することを奨励して下さった。具体的には、日本ユニセフ協会に訪問し、個人からの寄付金調達の担当者の方に複数回インタビューを実施した。

また、東京に居住することを利用して、業務時間外に、非営利組織の寄付金調達を円滑する活動を行っている民間企業・団体を訪問し、関係構築に努めた。具体的には、Yahoo!JAPAN内、Yahoo!ボランティアを訪問するなど、インタビューを多数実施した。

このように私の研究課題や興味関心について認めて頂けたことはとても心強く、今回のインターンシップを最大限に活用したという実感を持つことができた。

3) 振り返り編

国際機関における働き方：

私はこれまでに国内の金融機関、関連のシンクタンクにおいて勤務経験があったが、UNICEFでのインターンシップで感じた職場の雰囲気はそれまでのものと随分違った。当時、UNICEF東京事務所の職員数は、私を除けば7名だった。また、全ての業務に対してその専門家が揃っているわけではなく、お互いが補い合いながら業務を行っている状態であった。そのため、UNICEFが重視する方針に沿った形で、業務については明確に優先順位が付けられ、いずれかの業務については行わない、後回しにするという選択が積極的に取られていた。前職でも、「優先順位」という言葉は謳い文句のように使われていたが、クオリティ・コントロールされる形で管理することは稀で、結果として、全てのことを精一杯頑張る、という精神が奨励される職場であった。UNICEF東京事務所で体感した、UNICEFが掲げるミッションを限られた資源の範囲で効果的に達成することを実践する姿勢は、私に新しい視点を与えてくれた。

今後：

UNICEF東京事務所においてインターンシップを行ったことは、私のその後の研究活動において、多くのチャンスや示唆を与えてくれる重要な体験となっている。具体的には、UNICEF東京事務所の紹介から、2014年3月にUNICEFジュネーヴ事務所を訪問する機会が得られることになった。ジュネーヴ事務所には、個人及び民間企業からの寄付金調達活動について、世界各国のUNICEFに対してアドバイスを行う、Private Fundraising and Partnership Division (PFP) の本部があり、PFPの専門家のの方々と意見交換できることは、私の研究の視野をさらに広げてくれる機会となると期待している。また、インターンシップで各国の事務所の活動状況に触れる中で、なぜ、人は寄付するのか、のCauseに関する部分について具体的な事例や知識に沢山触ることができたことも良い経験となった。

改めて、インターン生として受け入れ下さった、平林所長を始めとするUNICEF東京事務所の皆様、また、インターンシップのきっかけを下さると共に、全面に渡って支援下さった、敦賀特任准教授を始めとするGLOCOLの皆様に心から御礼を申し上げたいと思う。本当に有難うございました。